



Title	アラブ詩研究の新潮流 : 鷺見(元好)朗子著 Description in Classical Arabic Poetryに寄せて
Author(s)	岡崎, 桂二
Citation	アラブ・イスラム研究. 2006, 5, p. 109-119
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105874
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アラブ詩研究の新潮流

—— 鷺見 (元好) 朗子著 *Description in Classical Arabic Poetry* に寄せて ——

岡崎 桂二*

ホラチウスやフェノロサを引くまでもなく、詩が絵画と、建築が音楽と、夫々、通底する要素を有するという認識は広く行き渡っていると思われるが、この認識を基に芸術作品を分析するには、博大な知識、高度な論理力、洗練された審美眼、等々広範圏に及ぶ学的能力と修養を要する。1970年代以降、アラブ詩研究は急速な変化を遂げてきているが、その新しい潮流の最先端に立つ研究者間には、詩の読解対象をことばの面に限定するのではなく、詩中の諸要素を芸術各分野の相互関連の中で解釈し、多岐に亘る学問分野の成果を援用しようとする共通理解がある。そのような流れの中で研鑽を積まれた鷺見氏 (京都ノートルダム女子大学助教授、放送大学客員助教授) が、芸術の各分野を横断する読みをアラブ詩に試みた斬新な研究成果を世に問われた。氏はアラブ詩研究の一方の旗頭を務めるインディアナ大学の S. Stetkevych の下で研究を続けられ、‘シカゴ学派’の一員として、緻密なテキスト・リーディングと犀利な論理構成で一書を物された。本稿は鷺見氏の著作を紹介するとともに、近年のアラブ古典詩研究の問題意識、研究動向、を合わせてまとめてみたい。

鷺見氏の研究書である *Description in Classical Arabic Poetry* は、Brill Studies in Middle Eastern Literatures シリーズの第25巻として出版されたもので、副題として *Wasf, Ekphrasis, and Interarts Theory* (ワスフ、エクフラシス、間芸術理論) が付されている。このサブタイトルが端的に示すように、氏の意図はアラブ詩 (カスィーダ) の根幹をなす「描写 (ワスフ)」部分を、エクフラシス概念や他の学問分野の諸理論を援用して解釈しようとするものである。全体の構成は序文に始まり、続く序論と結論部分をはさみ、5章の分析部分から成っており、その後に本文で引用し英訳されたアラビア語の原詩が付されており、最後に参考文献、索引が置かれている。本論の5章は、全て北米学界での口頭発表、それに基づく研究論文として *Journal of Arabic Literature* 等の研究誌に発表されたもので、まとめて博士請求論文としてインディアナ大学に提出された論文である。そして今回新たに標題の下に稿を改められたものであり、ワスフという一つの主題で一貫しており、著者の思考を追い易く、リーダブルな作品である。

序論において、著者はこれまでのアラブ詩研究を概観し、ついでエクフラシス理

* 四天王寺国際仏教大学 教授

論の歴史、原理、その有効性を論じている。(この部分は『関西アラブ・イスラム研究』にその要旨が発表されている)。氏は Grunebaum 等を代表とする旧弊のアラブ詩理解、とりわけ「描写」部分の理解、を非難する。従来、欧米のアラブ古典詩研究家たちは、おしなべてアラブ詩の没個性な面を非難し、一行の完結性を重視するあまり、詩全体の構成力が欠け、各部が相互に分離した「原子的性格 atomic」を有す、と指摘していた。このような否定的見解に対して、アラブ詩の描写部分は単なる対象物の細密描写ではなく、そこに象徴的、表象的、比喩的なものを表現しようとする詩人の意図が込められている、と著者は反論する。そして表面上の描写の下に隠された様々な記号を解明することで、その詩が発表された原初の姿が理解できるとする自己の立場を表明する。著者は西洋のエクフラシス理論、とりわけエナーゲイア論と、アラブ詩論家のイブン・ラシークの描写論の相似を指摘する。早くも11世紀にイブン・ラシークは、「ワスフに視覚的要素と感覚的要素を重視する」批評態度を取っていたと説く。

第1章から第5章までの本論は、すべて、問題点の説明、分析の意図で始まり、次いで分析対象の詩の英訳が示され、最後に分析結果が示される、という手堅い構成になっている。第1章ではジャーヒリーヤ期のイムルゥ・アルカイスとアルカマ、第2章は、イスラム勃興期をはさみ、その前後の時代を生きた詩人であり、共にフザイル族に属するサーイダとアブー・ズアイブ、第3章はアッバース朝のアブー・ヌワースとブフトゥリー、第4章はイブン・アッルーミー、そして第5章はアンダルシアのイブン・ザムラク、と多様な時代、地域に亘るアラブ詩人が時代順に取り上げられている。以下、簡単に各章の紹介を行う。

第1章は「儀礼としての競技——イムルゥ・アルカイスとアルカマ・アルファフルの馬の描写に関する前イスラム期の詩の競技——」と題されている。古代より広く近東地域に「文学競技」が行われていたが、アラブ詩においても同一の主題、韻律で作品の優劣を争う競技 (mu'āraḡah) が盛んに行われていた。著者はそのような伝統の中から生み出された「馬」の描写をテーマとする競争詩を対象に選んだ。当該の2作品は、アルカマがファフル (駿馬、第一級詩人、の意) という渾名を冠される契機をなす命名譚に関して、逸話を生み出した有名な詩である。しかし、アルカマ詩はその全46行のうち18行がイムルゥ・アルカイス詩 (全55行) と同一であるテキスト・クリティック上の問題を孕んでいる。このような事情を勘案して、著者は詩に付されている伝承情報 (ハバル) を詩の分析に積極的に利用しようとする。そして『ムファッダリヤート』やイブン・クタイバの伝えるハバルの分析により、アルカマは馬の生物学的描写においてイムルゥ・アルカイスを凌駕したのではなく、馬の描写が喚起する「強大、勇気、男らしさ」等のイメージにおいて優れていたゆえに、詩競技の勝者に認定され、「第一級詩人 (ファフル)」の称号が与えられたと説く。つまり、対象物 (馬) の細密描写の優劣が重視されたのではなく、その描写が生み出す抽象的なイメージ喚起力が評価されたのだと、著者は説明する。

「治癒と決意——フザイル族の2詩人の蜜蜂と蜂蜜採取詩」と題されている第2章で

は、ジャーヒリーヤ期の詩人と、イスラム勃興をはさんでその前後の時代を生きた詩人（ムハドラム）とを取り上げている。サーイダとアブー・ズアイブは同部族に属し、ともに蜜蜂と蜂蜜採取をテーマとする詩を作り、そこに蜂蜜を葡萄酒に準える描写を行っている。著者は両者の詩の比較を通して、アラブ詩におけるワスフ（描写）の機能と象徴作用を読み取ろうとする。鷲見氏の独創的な読みは M. Sells の論考を援用することにより、蜜蜂と蜂蜜採取のモチーフは、治癒と決意の象徴の役割を果たしている、と解するところに発揮されている。さらに、両詩の文体的、構造的差違は、詩全体のムードと意味において相違をもたらしていると結論づけ、その原因にイスラム勃興による部族社会の崩壊を挙げている。

1、2章は広義のエクフラシス、即ち詩の絵画的、修辭的表現の解明、にあったが、後続の3章においては、より狭義の、そして現代的なその定義、つまり「非言語テクストの言語的表象」（11, 92）、が分析対象となっている。

第3章は「現実と幻想——二人のアッバース朝詩人、アブー・ヌワースとブフトゥリーの詩における葡萄酒とエクフラシス」と題され、分析対象には、共に葡萄酒とサーサーン朝という共通のモチーフが使われているアブー・ヌワースの「居酒屋跡 Aṭlāl Ḥānah」とブフトゥリーの「イーワーン・キスラー」が選ばれている。著者は詩と絵画の関連から、テキスト内部に隠されたサーサーン朝の王達に対する賞讃（マディーフ）の要素と、時の支配者に対する誹謗（ヒジャーウ）とを読み取ろうとし、さらに葡萄酒の描写を通して、二人の詩人が現実と幻想の世界を往還する様を比較しようとする。

8行から成るアブー・ヌワース詩（参照、堀、36~38）を、著者は断片詩（キトゥア）ではなく、愛の序章（ナシーブ）、旅立ち（ラヒール）、賞讃（マディーフ）の3部構成のカスィーダとして読み解く。そして狩人に追われるレイヨウが刻まれ、さらに底部にはキスラーが彫られている酒盃の描写に関して、そのイメージ喚起力の大きさを指摘する。

他方、56行から成るブフトゥリー詩に関しては、著者は全編を覆うメランコリックなトーンを指摘し、その中であってサーサーン朝の旧址の描写は、その荒廃した様から落魄した詩人自身との一体化が為されていると読み解く。氏は分析に当たって D. Quint の「敗者の詩」論や、エナーゲイア論を援用する。

第4章は「感性と共感覚——イブン・アッルーミーの女奴隷歌手——」と題され、言語芸術と音楽との相関関係を扱っている。分析に当たっては、L. Kramer の「ジェスチャー理論」、Jāhiz の女性歌手に関する記述、そして G. Sawa の古代近東における音楽研究、が論旨を支える道具として用いられており、さらに H. R. Jauss の「期待の地平論」も引かれている。ルーミーは女歌手の外見描写に止まらず、歌唱という舞台背景から、彼女の歌声や肉体的特徴を再現（ミメシス）するのに成功していると、著者は結論づけている。詩人は女歌手の容姿と歌声の素晴らしさを、受容者（詩の読者、聴衆）の五感に訴えかけることで余す所無く描き尽くしていると説く。

著者の分析によれば、ルーミー詩の描写法の特徴は、対象（女歌手）そのものを

描くことではなく、それを取り巻く周囲の人物の反応を描いているところに有り、この技法により、詩の享受者はあたかも自身が詩中の人物であるかのような共感覚を覚え、詩的感興 (タラブ) に浸ることが可能になる。

「詩と人物描写——イブン・ザムラクの賞讃詩における二重像」と題されている第5章においては、詩、絵画、建築、という3部門の芸術分野の相関関係が論じられている。分析対象はスペイン・ナスル朝のイブン・ザムラク (1333年~1393年?) が時の支配者のムハンマド5世に捧げた賞讃詩である。この詩は全146行に及ぶ長大なもので、1~28行がナシーブ、29~146行がマディーフという2部構造を成しているが、マディーフ部分には、60~105行に亘ってアルハンプラ宮殿の描写が挟み込まれている。著者はこの宮殿の描写部分において、単に建造物の細密描写が行われているのではなく、その描写を通して支配者の讃美、並びに詩人自身の自讃が読み取れることを実証している。鷲見氏はこのような提喩法を用いた技法を、R. Brilliant の用語を借りて「表象的肖像 emblematic portrait」と名付ける。また著者の分析は、ザムラク詩の一部 (60~70, 87~89, 92~93, 103~105, 123の各行) が宮殿内部の壁面に刻印されていることにも向けられている。この事実を氏は、「建築物が言語化されるとともに、逆に、言語芸術が建造物化されている」(183) と読み解く。そして壁面に刻まれた詩句は、エクフラシスによって宮殿を支配者の象徴と化した詩の解説の役を果たしていると説く。イブン・ザムラクの詩は著者の分析を受けて、言語芸術 (詩)、視覚芸術 (絵画)、造形芸術 (建築) の複雑な相互増幅作用を齎し、その結果、建築物ともども、詩、詩人、被賞讃者、3者の永遠性が保証されることになる。さらに言えば、著者がこの隠された関係を明らかにすることにより、イブン・ザムラク詩は再び本来の意義、生命力を取り戻したのである。

このようにして、従来、没个性的で全体の緊密な構成力に欠けるとして非難されてきたアラブ詩の描写部分は、多方面の理論に基づく著者の綿密な読みにより、テクストに秘められた謎が解き明かされて、全く新しい相貌を我々の前に見せることになった。著者が序文で述べる「西洋批評理論と呼応した方法で、アラブ詩の隠されてきた美学的側面を解明する」(IX) という意図は十全に果たされたと評価できるであろう。そして、必ずや日本語に訳される日があらうと期待しているが、その実現の際には、この研究が有する *interarts* な特質からして、文学界のみならず、多岐に亘る学問分野に裨益するところ大であると期待される。本書の日本語訳の出版の早からんことを念じつつ、以下にその書き直しの際に考慮に入れて欲しい点と、行文中で疑問を感じた点を記す。

分析の冴えは4章と5章において際立っており、それに比して1章と2章では切れ味はやや鈍いと思われる。その主因として2点指摘できるであろう。一つは著者の方法論に関わり、他は分析内容に関する。序論において解説しているように、エクフラシスは当該作品における事物の絵画的描写と、その転用であるが、1、2章は事物 (馬・蜜蜂・蜂蜜採取) の描写の分析に充てられており、描写に込められているイメージ分析、という手法とその結果に新鮮味が欠けるからであろう。他方、4、5章が

斬新でユニークな研究と思われるのは、「非言語テキストの言語化」という狭義のエクフラシス理論の援用により、詩と音楽、絵画、建築相互の関連が解明されているからであろう。また文学批評において、用いる理論の有効性ととも重要なのが、対象作品の取捨選択である。つまり、対象とする作品が優れていなければ、いかに鋭い読みであっても、その批評は読者の興味を引かない。その意味において、1章、3章の詩が優れているとは言え、人口に膾炙し慣れ親しまれた詩であるのに対して、4、5章で取り上げられている詩は、作品そのものが斬新であり、その選択に著者の鋭敏な審美眼が発揮されていると読者には強く感じられる。このような問題点をいさ少し詳しく記す。

第1章の「馬」、第2章における「蜂・蜂蜜」、から派生するイメージは、著者も述べるごとく (61)、前者は「力強さ・エロチック」、後者は「勤勉・再生、精力・雄弁 (甘言)・永遠性」という古今東西、普遍的なものである。それゆえ、このようなイメージに基づいて当該の詩の分析を行ない、結論を導いたとしても、その結論には余り新味が見うけられないであろうし、また改めてエクフラシスという概念を用いずとも、このような手法は詩の解釈の常道である。

さらにアルカマがファフルと名付けられるようになった命名譚には諸説あり、それらの紹介は必ずしも十分であるとは思えない。さらにアルカマ詩の46行中、18行がイムルウ・アルカイス詩と同一、という詩の借用、剽窃や、伝承に関する疑義もある。このような複合的な要素が絡み合う疑念を抱きつつ、読者は読み進めていかなくてはならないが、著者の分析によりその疑問が解消されたとは言い難い。モンゴメリーが指摘するように、馬の描写を巡って、アラブ詩において詩聖と称しても良い相手に挑戦し、勝利を収めた人物 (アルカマ) の当該詩が、浩瀚なジャーヒズの『動物誌』に記載されていない理由をも説明すべきであろう。(参照、Montgomery, *Arabica* 論文)

第2章に関しては事情は少し異なる。蜂蜜から純粹→立ち去りし恋人→失われた庭園・天国の楽園→永遠性、という重層的なイメージ連鎖を著者は導き出している。しかし、アラブ文化における「失われた庭園」(lost garden, meadow) とは何を指すのかの説明抜きで、蜂蜜採取の描写には「失われた庭園」を追求するイメージが込められているとする主張は、十分な説得力があるとは思われない。援用するセルズやステケヴィッチに関して、「失われた庭園」とはつまり (or) 「天国の楽園」なのだ、と著者が主張する (74, 79) その論考内容の、より詳細な紹介が必要であろう。また著者はこのイメージ連鎖の解明において、『コーラン』や『ハディース』に依拠して綿密に論証を重ねてはいるが、ムハドラム詩人においては、新しい宗教 (イスラム) の影響は限定的であったとする論をも考慮すべきではなかったか。(参照、Montgomery, *The Vagaries*, 第6章; al-Qādī; Zubaidi)。

第1章のイムルウ・アルカイスとアルカマ詩と並んで、第3章のアブー・ヌワースとブフトゥリー詩もともに名高く、人口に膾炙した詩であるが、著者が行ったごとく、詩人の精神面にも及ぶ深い読みは皆無であり、著者の功績が光る。しかしなが

ら、アブー・ヌワース詩は8行にしか過ぎず、これを断片詩や酒讃詩 (*khamriyya*) ではなく、カスィード (定型長詩) と見なすには抵抗がある。著者はカスィードの定義を「通常15行から80行の長さで、複数のテーマを含んだ、韻律と脚韻を踏むもの」であると説く (1, 94, 134)。この第3章のアブー・ヌワース詩がナシーブ、ラヒール、ヒジャーウの3部構造であるとする著者の鋭い読みにも関わらず、この短い詩をカスィードとするのは著者の定義に違背するのではないのか。著者がアブー・ヌワース詩に関して、単一のテーマに終始するキトゥアやハムリーヤではなく、2部構造、3部構造を有するがゆえにカスィードであるとするならば、定義の変更が必要とされよう。この点に関しては、著者の日本での研究発表の場において、同趣旨の疑義が呈されており、決して評者一人の疑問では無いと思われる。

また著者は、1、2章の馬、蜜蜂は自然物であってテキストではなく、3章の酒盃や旧址はテキストであると述べるが、描写対象が自然物であれ、人工物であれ、詩の分析においてその両者を区別する必要があるのか、疑問に感じられる。景物詩中の叙述対象とそのイメージ分析において、自然物と人工物とに差をつける必然性は低いと思われる。さらに、著者は蜂蜜採取における燻煙を文化的な武器 (*cultural weapon*) の利用と説明する (86)。著者のこの説明は、水に蜂蜜を入れて放置、発酵させ、神々の飲み物、蜂蜜水、を作り出す作業に文化を見出したレヴィ=ストロースを想起させるが、この立場からすれば、1章の馬は野生馬ではなく乗馬であり、人間により馴化されたものであり (29)、人間文化の産物として酒盃と同等の資格を有する。何れにせよ、馬や蜜蜂、あるいは酒盃も、イメージ分析の対象としては等価であろう。

著者は序文で原初の姿を再現、再建を目的とすると書かれ、文中幾度となく「原初の読者・聴衆 *original reader, audience*」という表現がある (90, 99, 113, 114, 125, 193)。現代作品はもとより、われわれと生息環境や感受性を異にする古典作品であれば尚のこと、当該作品が生み出された自然環境や動・植物相 (*fauna et flora*) の知識が作品解釈に要求されるのは当然のことであり、著者のこの面における学的努力は敬服に値する。しかしながら、著者の諸理論を援用し、資料の博搜により得られた結論は、あくまでも一つの解釈であり、直ちに原初の読者が得た印象や感動とは結び付けられないのではないだろうか。著者の解説はテキストに隠されていた意味やイメージを明らかにしはしたが、その得られた結果は必ずしも *original reader* が看取、感得したものと同一であることを保証はしないと思われる。歴史解釈と同様に、芸術作品の解釈、意義は時代と共に変化する。第3章のブフトゥリー詩に関して著者と同門のアリーが、著者らの説くカリフに対する誹謗を否定し、宮廷詩人の立場から分析した新論考を提出しているのが、その一証左となろう (Ali 論文参照)。

このことに関して、第4章の58行に及ぶ長詩が、メロディーを付けて詠唱されたという仮定で分析が進められているが、このような行為はむしろ例外的ではなかったのか。(参照、Gelder, p. 395)。そして、実際に詠唱されたという仮定を枠組 (*frame*) として分析が進められていくゆえに、必然的に行文中に *if* は当然のこととして、*assume*, *assumption* を筆頭に、*would*, *might* あるいは *presumably*, *likely* 等々、仮定を表す語が

頻出する。それゆえ読者は解釈の正当性に疑念を抱きつつ読み進めなければならない。詩と音楽との緊密な相関関係を明らかにした著者の当該詩の解釈は、真に独創的なものであるので、不必要な疑念を読者に与えないためにも、この仮定の枠組みは外して、詩の分析に集中したほうが良かったのではないと思われる。

またゲルダーも本書の書評で言及しているように、引用文献において、やや不満が残る。例えば、第1章、第2章の「競争詩」を論ずるには、Reinink 他編『古代・中世近東の論争詩』所載の Heinrichs と Gelder 論文が参照されるべきであり、第2章のフザイル族の蜂蜜採取に関しては Canova の研究がある。また第3章のアブー・ヌワースのシュウビー的要素を論ずる際には、古典的な Goldziher だけではその本質を見誤る恐れがあり、今や定説となっている Gibb の論考は言うまでも無く、当該詩人を対象にしている Arazi 論文は必須であろう。また第5章において Ibn Shuhayd に言及されているが、「詩集」からの引用ではなく、自作の詩が書き込まれているとはいえ、サジュウ体の『二詩霊の書簡 *Risāla al-Tawābī' wa-al-Zawābī'*』から例が引かれているのも疑問に感ずる。

Wen-chin Ouyang は自著の序文において、自己の専攻分野を「中世 (9~11世紀) アラブ文学批評」であると明かした時に、相手が示す不信感を記しているが、アラブ文化やアラブ文学に対する無理解や誤解は根深い。そのような風潮の中、鷺見氏は堅実な学問的論証を通して、アラブ文化の精華であるアラブ詩の魅力を解き明かし、詩中、最も非難にさらされてきた「描写」部分の意義を示された。そして上述の要らざる評言は、その功績が真に大と認め、研究の一段の完成度を求めるゆえのものとして寛恕願いたい。

さて以下に、氏の研究書理解の一助となるとともに、近年のアラブ古典詩研究の問題意識や研究動向を把握するのに役立つと思われる著作を紹介したい。

先ず鷺見氏の著作の理論的支柱を成す Selles の論文を取り上げる。当該論文は、社会学や経済学の分野で名高い「シカゴ学派」が、アラブ文学研究において、その学派形成の旗揚げを宣言する『アラブ詩ペルシア詩再入門』に登載されており、アラブ詩研究において、近年最も引用度が高いと思われる重要論文である。

「グールの変幻——アラブ古典詩のナシーブにおける仮装的直喩と意味的越境」と題された論文において、セルズは「愛の序章」と称されるカスィーダの冒頭部分(ナシーブ)の比喻表現を考察の対象としている。アラブ詩においては、詩人が恋人の居住跡に佇み、その面影を偲ぶ描写で詩を詠み始めるのが、ジャーヒリーヤ期以来の伝統となっていたが、そこでは恋人がレイヨウ、ラクダを始めとする沙漠の動植物、葡萄酒、真珠、船、等々、様々な物に喩えられるが、その表現が画一的で、平板であるとして、欧米の研究者からアラブ詩の没個性的性格を示す点として非難にさらされてきた。

これに対して、セルズは鷺見氏と同様の問題意識から考察を進め、カスィーダ冒頭において定型化されていた恋人の描写や自然詠は、単に対象人物(恋人)や比喻対象(レイヨウ、ラクダ、等)の細密描写を意図したものではなく、その重層的な

比喩により、より大きく、かつ統一された概念を描き出していることを実証しようとする。セルズはジャーヒリーヤ期のアルカマ、アンタラ、カアブ、タラファの各ナシーブを精査し、そこに横溢する「水」に関わるイメージを抽出し、それらは合わさって性的結合と純化を象徴的に表現し、さらに豊穡、成長、清算、等の抽象概念を想起させることを明らかにした。そして互いに結ばれた比喩連合から、ジャーヒリーヤ期のナシーブには、「失われた楽園」イメージが込められていると、セルズは説く。また彼は当該論文に先行する論考において、カスィーダの「旅立ち *raḥīl*」部分を取り上げて、そこで様々な物に喩えられているラクダの描写は、通過儀礼の *liminal* な段階を象徴していることを実証した。

‘シカゴ学派’の総帥である J. Stetkevych は、『アラブ詩・ペルシア詩再入門』において、「アラブ哀歌語彙集を目ざして——ナシーブの7語——」において、セルズと同様、ナシーブを対象とし、そこで頻出し、ナシーブ理解の核を成す重要語彙の読解を試みた。彼は語源学、意味論、神話論的詩学、比喩連合、等、多岐に亘る広大な知見を総動員して、露営址 (*ṭalal*)、住居 (*dār*)、春季宿营地 (*rabʿ*)、堀・溝 (*nuʿy*)、糞 (*dimnah*)、炉床 (*athāfī*)、問いかけ (*suʿāl*)、の各語を分析し、これらの語の背後に隠された原型、神話を解読しようとする。

非アラブ文化に属する者にとって「糞・排泄物」なる語は、最も詩的言語として不適切と思われ、かつ詩におけるその使用は理解し難い。しかし彼の斬新な読みにより、この語に内包される意味とイメージの広がりが見えていく。*Dimnah* は「動物の排泄物と居住により黒ずんだ地面」という基本的な意味を持ち、カスィーダにおいては過ぎ去りし恋人を偲ぶ縁^{よすが}となり、詩人は冒頭部 (ナシーブ) において、しばしその場に佇み、回想に耽るのが慣わしとなっていた。ステトケヴィッチは言語学的アプローチでこの語の解析を試み、セム系言語に特徴的な語根に着目して、語根3文字を入れ替えたり、類音を持つ語や対義語を考える。かくして、*d-m-n* → *ḍ-m-n* → *ḍ-m-r* の音連鎖が導き出されて、*diman* の原義である「暗い」と「隠す」から、「過去に失われた物」「隠された恨み」の意があり、さらに *d-y-n* との関連から、糞 → 糞甲虫 → 墓 → 都市の関連を引き出す。かくして糞の一語をはさんで露营地跡と都市址が結びつき、両者に共通する栄光と再生のイメージが引き出され、この語が愛の序詩で用いられる理由が明らかにされた。詩語理解における彼の研究法により、詩が何よりことばの芸術、音の芸術であることを改めて思い出され、表面上の語義理解に止まっていた詩の鑑賞は不能である事実を痛感させられる。

フィロロジカルな面からカスィーダを解読しようとする J. Stetkevych に対して、S. Stetkevych は、モースの贈与論、ジュネップの通過儀礼説、ガスターの2季循環説、等の人類学を筆頭に、多岐に亘る学問分野の理論をアラブ詩理解に援用する。彼女は前イスラム期の詩を対象とした研究書に続いて、年代、地域に関して考察の範囲を一層広げた『イスラムの正統性に関する詩学——アラブ古典詩における神話・ジェンダー・儀式——』を著した。S.ステトケヴィッチはイスラム勃興後、アラブ詩作の中心をなす支配者や貴人に対する賞讃詩 (*qaṣīdat al-madh*) において、賞賛する

者（詩人）とされる者（支配者・貴人）の間で儀礼的応酬が行われていると説く。つまり、新しく形成された宮廷という文化の中心の場で、詩人は支配者を賞賛する詩を詠んでその支配の正統性を遍く知らせ、他方、支配者はその功績に対して褒賞を授与する。ステトケヴィッチはアラブ詩の歴史を通して、詩を仲介としてこのような互酬関係が樹立されていたことを、前イスラム期のナービガから始めて、その詩作に対して預言者ムハンマドより外衣を下賜されたとされるズハイル、ウマイヤ朝のアフタル、さらにアッバース朝のアブー・タンマームやムタナッビー、次いでアンダルシアの詩人と、考察の輪を広げる。

彼女の問題意識と研究姿勢が端的に現れている第3章「祝賀と回復——カリフ賞賛——」では、ウマイヤ朝第5代カリフ、アブドゥ・ル・マリクにアフタルが捧げた賞賛詩を分析している。ステトケヴィッチは、詩を詠むようにとのカリフの下令に対して、詩人は先ず酒を所望したという逸話を手掛かりに、いかにしてキリスト教徒のアフタルが桂冠詩人の榮譽を勝ち取ったかを論証する。酒はイスラム教徒には禁断のものであり、他方キリスト教徒にとっては聖なる要素を含んでいる。酒が内包するこの二項対立の関係は賞賛詩の朗誦を期に反転する。つまり、詩人の非礼に対するカリフの怒りは歓喜に変わり、アラブの美德である寛大さを誇示すべく褒賞を指示する。詩人は賞賛詩で非行の償還を実現し、他方、カリフは衆人環視の下での一連の行為によって自身の権威を確立できた、と説く。

アラブ詩研究において、多様な学問分野の成果を詩解説に適用して、比較文学的、比較言語学的アプローチを取ろうとする研究傾向がある一方で、残存する資料をコーパスとして利用し、多数の文献を分析することで研究の客観的な精度を上げようとする動向がある。この手法は Bencheikh を嚆矢とし、ヘブライ大学のコレクションを精査する Arazi (1989年) が続き、近年では Lyons が代表者であろう。彼は作品中の時間空間に関する表現、事物の描写、比喩やイメージを、時代を追って精査し、同様の表現が繰り返し用いられているにも関わらず、そこに詩人ごとの、また時代別の差違があり、各詩人の個性、時代別の特徴が現れていることを明らかにした。補遺 (pp. 300~359) においてまとめ上げられたアラブ詩のモチーフ・インデックスは、便利な用例集であるとともに、今後アラブ詩研究家が必ず参照しなければならない文献である。

ライオンズと同様に Montgomery も、アラブ詩理解をアラブ詩内で解決しようとする。アラブ古典詩研究において、信頼に足るテキストの確保が隘路となっていたが、彼は可能な限りの異本を収集し、その異同を校訂し、アッバース朝期の編集者の編集意図を明らかにした。そして、モンゴメリーは研究で得た知見に基づき、エピローグで5項目から成る「宣言 manifest」を提出しているが、これら5項目はアラブ古典詩研究家自身の研究姿勢、立場を問う試金石の役割を果たしている。特に、第1項「前イスラム期の詩に同一のもの無し」、第3項「前イスラム期の詩の大部分は口承ではない」は、全てのアラブ詩研究者が取り組み、自己の旗幟を鮮明にすべき課題であろう。

この他、紹介すべき研究は多々あるが、この分野に興味の有る読者は、Heinrichs 他編『ワグナー記念論文集』第2巻、Smart 編『アラビア語とアラブ文学における伝統と近代』、Neuwirth 編『アラブ文学における神話、歴史的原型、象徴像』、等の論文集を参照すれば、近年のアラブ詩研究の最先端が一望できよう。

最後に岡崎「研究ノート」において紹介済みであるが、カスィーダ・ジャンルのアラブ圏外への広がり概観するには Sperl 他編『イスラム・アジア・アフリカのカスィーダ詩』が便利であり、Jones の『古典アラブ詩』2巻は、丁寧に読みの実践を伝授してくれるであろう。

[文中の () 内数字は引用文献中の当該頁を指す。]

[引用文献]

- Alī, S. M., "Reinterpreting Al-Buḥārī's Īwān Kisrā Ode: Tears of Affection for the Cycles of History", *Journal of Arabic Literature*, 37 (2006).
- Arazi, A., "Abū Nuwās: fut-il Šu'ūbite?", *Arabica*, 26 (1979).
- , *La Réalité et la fiction dans la poésie arabe ancienne*, Paris, Maisonneuve & Larose, 1989.
- Bencheikh, J. E., *Poétique arabe*, précédée de Essai sur un discours critique, Paris, Gallimard, 1975.
- Canova, G., "'Cacciatori di Miele': dalla poesia ḥudalita alle pratiche tradizionali nel Dhofar (Oman)," *Quaderni di Studi Arabi*, 20-21 (2002~2003).
- Gelder, G. J. van, Review of Akiko Motoyoshi Sumi's *Description in Classical Arabic Poetry*, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 67 (2004).
- Gibb, H. A. R., "The Social Significance of the Shuubiyā," in his *Studies on the Civilization of Islam*, eds. S. J. Shaw & W. R. Polk, London, Routledge & Kegan Paul, 1962.
- Heinrichs, W. & Schoeler, G. (eds.), *Festschrift Ewald Wagner zum 65. Geburtstag*, band 2, Studien zur Arabischen Dichtung (Beiruter Texte und Studien, 54), Stuttgart, Franz Steiner, 1994.
- Jones, A., *Early Arabic Poetry*, vol.1, *Marāthī and Šu'lūk Poems*; vol.2, *Select Odes* (Oxford Oriental Institute Monographs, 14 & 15), Reading, Ithaca Press, 1992, 1996.
- Lyons, M. C., *Identification and Identity in Classical Arabic Poetry*, Warminster, Aris & Phillips (E. J. W. Gibb Memorial Trust), 1999.
- Montgomery, J. E., "Alqama Al-Fahl's Contest with Imru' Al-Qays: What Happens When a Poet Is Umpired by His Wife?", *Arabica* 44 (1997).
- , *The Vagaries of the Qaṣīdah; The Tradition and Practice of Early Arabic Poetry* (Gibb Literary Studies, No.1), Cambridge, E. J. W. Gibb Memorial Trust, 1997.
- Neuwirth, A., Embaló, B. et al (eds.), *Myths, Historical Archetypes and Symbolic Figures in Arabic Literature: Towards a New Hermeneutic Approach* (Proceedings of the International Symposium in Beirut, June 25th-June 30th, 1996, Beiruter Texte und Studien, 64), Stuttgart, Franz Steiner, 1999.
- Ouyang, W. Ch., *Literary Criticism in Medieval Arabic-Islamic Culture; The Making of a Tradition*, Edinburgh, Edinburgh UP., 1997.
- Al-Qādī, W., "The Limitations of Qur'ānic Usage in Early Arabic Poetry: the Example of a Khārijite Poem," in *Festschrift Ewald Wagner zum 65. Geburtstag*, band 2, Studien zur Arabischen Dichtung (Beiruter Texte und Studien, 54), eds., W. Heinrichs & G. Schoeler, Stuttgart, Franz Steiner, 1994.
- Reinink, G. J. and Vanstiphout, H. L. J., (eds.), *Dispute Poems and Dialogues in the Ancient and Mediaeval Near East: Forms and Types of Literary Debates in Semitic and Related Literatures*, (Orientalia Lovaniensia Analecta, 42), Leuven, Peeters, 1991.
- Sells, M. A., "Like the Arms of a Drowning Man: Simile and Symbol Worlds in the Nāqa Sec-

- tion of Bashāma's *Hajarta Umāma*," in *Festschrift Ewald Wagner zum 65. Geburtstag*, band 2, *Studien zur Arabischen Dichtung* (Beiruter Texte und Studien, 54), eds., W. Heinrichs & G. Schoeler, Stuttgart, Franz Steiner, 1994.
- , "Guises of the *Ghūl*; Dissembling Similes and Semantic Overflow in the Classical Arabic *Nasīb*," in *Reorientations/Arabic and Persian Poetry*, ed. S.P. Stetkevych, Bloomington and Indianapolis, Indiana UP., 1994.
- Smart, J.R. (ed.), *Tradition and Modernity in Arabic Language and Literature*, Surrey, Curzon, 1996.
- Sperl, S. & Schackel, Ch. (eds.), *Qasida Poetry in Islamic Asia and Africa*, vol. 1, *Classical Traditions and Modern Meanings*; vol. 2, *Eulogy's Bounty, Meaning's Abundance: An Anthology*, Leiden, E.J. Brill, 1996.
- Stetkevych, J., *The Zephyrs of Najd; The Poetics of Nostalgia in the Classical Arabic Nasīb*, Chicago and London, The University of Chicago Press, 1993.
- , "Toward an Arabic Elegiac Lexicon; The Seven Words of the *Nasīb*," in *Reorientations/Arabic and Persian Poetry*, ed. S.P. Stetkevych, Bloomington and Indianapolis, Indiana UP., 1994.
- Stetkevych, S.P., *Reorientations/Arabic and Persian Poetry*, Bloomington and Indianapolis, Indiana UP., 1994.
- , *The Poetics of Islamic Legitimacy; Myth, Gender, and Ceremony in the Classical Arabic Ode*, Bloomington and Indianapolis, Indiana UP., 2002.
- Sumi, A.M., *Description in Classical Arabic Poetry; Wasf, Ekphrasis, and Interarts Theory*, Leiden and Boston, Brill, 2004.
- Zubaidi, A.M., "The Impact of the Qur'ān and *Ḥadīth* on Medieval Arabic Literature," in *Arabic Literature to the End of the Umayyad Period* (The Cambridge History of Arabic Literature), eds., A.F.L. Beeston, T.M. Johnstone, R.B. Serjeant and G.R. Smith, Cambridge, Cambridge UP., 1983.
- 岡崎桂二「研究ノート——アラブ古典詩研究——」『中東研究』, (財) 中東調査会, 446号 (1999).
- 鷺見朗子「象徴的表現としてのワスフ・エクフラシスに照らし合わせた理論的考察」『関西アラブ・イスラム研究』 関西アラブ研究会, 2号 (2002年).
- 埴治夫 (編訳) 『アブー・ヌワース アラブ飲酒詩選』 岩波書店, 1988年.